

軸に書かれていたのは、「正信偈」の中の一節である。「大悲無倦常照我」でした。「お正信偈の中で、わしが一番好きな言葉じゃ、って言っておられましたよ」とその方は教えてくれました。私は、その言葉で一気に涙腺が緩みそうになりましたが、必死でこらえながらこう答えました。「そうだったんですか、実は私も同じなんです。この言葉が一番好き。おじいちゃんも同じだったんですね」

●君が僕の名を呼べば

私はまだ高校生だったときのことです。父が門徒さん向けに、あるリーフレットを作ったことがありました。それは「正信偈」の「極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」を父が現代の言葉で表したものでした。

浄土真宗のみ教えは、私のころがどのようであるうとも、阿弥陀さまの、この私を仏にせずにはおけないという、摄取不捨の光の中に生かされているということなのです。

ひとり寂しく送る日も、苦しみと悲しみの底に沈んでいようと、また得意の絶頂にあるときも、阿弥陀さまを裏切り背いているときも、阿弥陀さまは摄取の光で抱いていてくださいます。凡夫の眼には見えなくても、大悲は常に照らします。いつも、どこでも、阿弥陀さまとともにあるという人生を、力強く歩く日々を「南無阿弥陀仏」と届けてくださっています。

私はこれを初めて読んだとき、まさに自分自身のことだと思いました。親に反抗したり、人には見せられないような醜いところを持っている、この私のことだと。そしてそんな私だからこそ放っておけないのが阿弥陀さまなのか、と初めて分かったのです。その言葉に出会っていなながらも、いったんはお寺を離れた私でした。そして再び戻ってきたときには、祖父も、そのお宅のご主人も、すでにお浄土に還られていたけれど、お盆のご縁でそのころに触れ、私はかけがえのない出逢いをしていただくことができました。私たちが今生きているこの社会は、便利になる一方で、なぜかどんどん忙しくなっているようにも感じます。仏となられた故人は、亡くなられてもなお、慌ただしく生きる私たちのことを想い、お盆のご縁を作ってくれているのかもしれない。私にはみ教えを現代の音楽にして歌う活動もしているのですが、父と祖父も大事にしていたあの一節を、私なりの言葉で歌にしたので紹介させていただきます。



君と僕

君が嬉しい時は 僕も嬉しい  
君が悲しい時は 僕も悲しい  
君が笑う時には 僕も笑うよ  
君が泣いている時は 僕も泣いてる  
泣いてしまえばいい 僕の前でだけは  
恰好つけないで どうか君のまま  
君が僕を想って 微笑む日々も  
君が僕を忘れて 背中向ける日も  
僕は君が心配で たまらないから  
いつも寄り添っているよ だから安心して  
まるで世界中で 独ぼちのような  
そんな夜こそ どうか僕を思い出して  
海が青いのは 空が青いから  
空が青いのは 光が照らしてくれているから  
君が僕の名を呼べば 僕はここにいますよ